東北大学法学部同窓会
會報

第　15　号
発　行　所
東北大学法学部同窓会
発　行　日
昭和63年6月30日
印　刷　所
今野出版企画㈱

川内記念講堂を巡って散策の楽しめる〝三太郎の小径〟が完成した
仙台市博物館を起点に阿部次郎先生を記念する遊歩道の一部となっている

川内だより

会長　太田知行

日本社会の変化とともに、法学部のキャンパスにも、除々に変化が見られます。今年の川内だよりでは、その内で、法学部の「国際化」の一端をお伝えしましょう。

法学部では、数年前から、日米教育委員会（フルブライト委員会）を通じて来日するアメリカ人教授が、アメリカ法もしくはアメリカ政治について講義をしており、今年は、ジョージア大学ロースクール準教授トーマス女史が、アメリカの消費者保護法を素材にしながら、アメリカの社会やその法的思考について講義をしていられます。また、その他にも、昨年から、ドイツ人のレンツ博士が常勤講師として法学部に在籍していられますが、同博士は、今年は、ゼミの外に、ドイツ法を講義しています。重要なことは、レンツ博士の講義は日本語で行なわれていますし、また、トーマスさんの講義は、法学部助手として日本政治を研究しているアメリカ人のケデル氏が通訳していることです。そして、トーマスさんの講義に出席している学生（二十名強）の中の何人かは、英語でドンドン質問をしています。このような講義風景は、数年前迄は、ほとんど想像できなかったのではないでしょうか。

また、大学院や学部で勉強している外国人も多くなり、その国籍も多様になりました。現在、大学院には、研究生も含めると四人の外国人（アメリカ人三人、ポーランド人一人）が、政治学、行政法、労働法を勉強しております。また、学部でも、若干名の外国人が学生、もしくは研究生として勉強しています。これらの外国人学生の多くは、日本語がかなりできる人達です。日本語は難しい、という神話の消滅も間もないように思われます。

なお、本年三月で、池田清教授（西洋政治史）が定年退官され、また、山本草二教授（国際法）が上智大学に移られました。他方、昨年秋には、遠藤比呂通（憲法）、森田宏樹（民法）の両助教授を迎えました。法学部のスタッフも、すっかり若返りました。

東北大学に勤め始めた頃

東北大学名誉教授　服部榮三

東北大学および仙台で三〇年近く過したわけであったが、その間の思い出は数々あって、何を採り上げてよいのか迷ってしまう。

東北大学に移る前は、同志社大学にいたが、東大で研究室生活をしばらく一緒にしたことのある世良晃志郎教授から東北大学に来ないかとの話しがあり、東北大学に移ることとなった。それは昭和三二年のことであったが、その当時は、わたくしの専攻する商法講座は小町谷操三先生が辞められ、伊沢孝平先生一人で、しかも伊沢先生も神戸に本宅があって、あたかも仙台に出張講義に来られているといった状況であったので、責任も重かったが、他方では重宝がられもした。赴任早々いろいろ法学部の委員をやらされ、また学生の方からも司法試験の指導を頼まれた。その年の秋の某日に、十数人の四年の学生が研究室に訪ねて来たので、さては講義に関する注文かと、一瞬緊張した。話しを聞いてみると、今年の司法試験には不幸にして合格しなかったが、留年覚悟で勉強するから、商法科目の受験指導をして欲しい、ということであった。喜んで引受けたが、この諸君がその後二、三年のうちにほとんど司法試験に合格し、唯今は弁護士あるいは判検事として活躍しているのは、もっとも嬉しい思い出の一つである。この年度の四年生は、わたくしがその前年に非常勤講師として、毎晩遅くまで飲んで宿酔気味で講義をしたのを聴講しているだけに、なお一層懐かしいものがある。

赴任当時は、学生は一五〇名内外で、また同僚スタッフ（教授・助教授）も一五名ほどで、まさにこぢんまりとしていて、大変居心地がよかった。教授会なども、余り議論がなくて直ぐ終ることが多かった。当時の法学部長は刑法の大家木村亀二先生であったが、あるとき、一〇分ほど遅刻していったら、教授会は終わりかけていて、何しに来たかと学部長ににらまれたこともあった。

また、その頃は、仙台市街は仙台砂漠といわれ、風が吹けば砂塵が舞いあがり、反対に雨が降れば至るところぬかるみとなる有様であった。大通りでも、真中の車道だけやっと舗装されていたが、舗道はやはり広いけれども、天然のままの状態であった。東一番丁から大学北門（当時は御承知のとおり大学は片平丁にあった）までの道も、わたくしが赴任した年の春に、東北大学五十周年記念事業の一環として舗装（ただし真中だけ）されるという状況であった。それでも、自動車がきわめて少なかったので、自動車による砂煙りの被害は大きくはなかったようである。

大学の北門近くには、市電の東一番丁の停留所があったが、その前の角に協和銀行仙台支店の入っているビルがあり、その屋上では毎夏同ビルで営業をしていた伯養軒が屋上ビアガーデンを開く例になっていた。赴任した翌年の夏（七月）だったと思うが、商法の非常勤講師として招いた上柳克郎京大教授と一緒に、たまたまガーデン開きの日に屋上で一杯やっていたら、カメラマンがやって来て、シャッターを切り、それが翌日の河北新報に「梅雨明ける」と題して載ったようなこともあった。

市電といえば、北仙台線（北四番町から北仙台駅前まで）を利用して大学に通ったのも、懐かしい思い出の一つである。市電の車輌は大都市のものに較べて小型であったが、北仙台線の車輌はその中でもとくに小型で、二〇人余りも乗れば一杯になるような感じであった。幸いに、西公園廻りあるいは仙台駅前廻りのいずれも、乗換えなしに一本で大学前の東一番丁まで行くことができたので、重宝した。コトコトと、距離の割には相当の時間がかかったが、一時間も乗っているわけではないので、のんびりした通勤を楽しむことができた。しかし、やがて、市電廃止の手始めとして北仙台線は最初に廃線となり、ゆっくりした通勤の夢は破れた。

赴任した頃は、同僚スタッフの多くが、米ヶ袋など大学の近くに住んでいた。前記の木村教授を始

め、柳瀬良幹（行政法）、鴨良弼（刑訴法）、小田滋（国際法）、広中俊雄（民法）、などの諸教授がそうであった。前記の小町谷先生も、仙台在住の頃は米ヶ袋に住んでおられた。大学の近くということは、東一番丁近くということでもあるから、東一番丁かいわいで一杯やった後の二次会では、右の諸教授宅に押しかけたものである。

その大学も、片平丁から川内に移った（この移転が自分の学部長時代であったことも、思い出の一つである）。赴任当時の教授・助教授の多くも定年で退官した。仙台も三〇万の都市が一〇〇万近い政令指定都市となった。こうして考えてみると、三〇年近くに及んで勤務し、あるいは在住した東北大学および仙台も、いつの間にか遠い存在となってしまったとの思いが強い。

法文学部の思いで

国民生活センター会長　有賀　美智子

高等女学校、日本女子大学校（戦後大学設置基準にのった事により「校」が消えた。それ迄は専門学校であった）と女子ばかりが居た学校から昭和四年四月東北帝国大学法文学部というのに入学して、まづ驚いたのは、教室が男子学生で埋められていたことだった。当り前のことなのだが、男子学生の中一人まじって勉学するという心の準備がなかったためである。正直言ってえらいことになったと思った。法文学部には法律系講座のみならず、国文学、英文学、心理学、哲学、独語、キリスト教や仏教など広く文科系の講座がもうけられていたから、法律系の講座には私一人だったが、他の学問分野で勉強していた女子学生は相当数居た。私は手製のあやしげな洋服を着ていたが、殆どの女子学生は和服で袴をつけていた。

よく人々に質問されるのだが、女子で帝国大学に入学するなど、何か特別な恩典でもあったのでしょうと。何でもない、入れるべくして入ったまでである。文科系の学部が大学に設置されると、大概の場合、それは法文学部である。第一次入学者は高等学校卒業者のみを受入れ、募集人員に不足が生ずると専門学校卒業者にも応募資格を広げ、専門学校は四年課程、高等学校は三年課程であるにもかかわらず、二次募集での入学試験は、高等学校卒を除き、高等学校卒業試験みたいに十数科目の試験が行われた。

幾人の女子学生が居たか明確には覚えていないが八人位だったと思う。大学は特に女子のための施設をもうけていなかったため我々は何かと不便を感じた。午後講義のあるときは弁当を持参しても食べる場所がなく、湯呑場の便宜もなかった。こんな不便を互いに話し合っているうちに誰からともなく、学部長に女子学生のための部屋を用意して頂くようお願いしようということになり、あなたは法律を勉強しているのだから陳情の代表役を引受けるようにと半ば押し付けられた形になった。仕方なく私は恐る恐る中村学部長室にお願いに参上した。先生は話の趣はわかった。沙汰を待つようにと希望的な御返事を頂いた。さてどこに部屋が頂けるかと多少の不安で待っていたら、数日後法文学部の事務室のある木造家屋の一階の一室に女子学生室の表示が掲げられた。ナントその部屋は教官室の隣である。今でなら絨緞に相当するリノリュームがデンと敷きつめられている十畳位の部屋だった。冬にはスチームも通っていた。私達は大いに満足し、茶道具をそろえ、小使室から大きな薬缶で熱湯をもらい、楽しい昼食時をもつことができた。部屋の獲得に成功したのに勢いを得て、この女子学生集団が団体として行動すべく名称をつけることになり、命名をまた中村学部長にお願いした。ある一日法文学部の近くのささやかな料亭に集合し、中村先生の御出席を煩わした。其の席で先生は我等の集まりを「芝蘭会」と命名して下さった。命名書は巻紙に墨痕あざやかに横書にされ、壁にはられた。先生は漢詩からとられた温かいこの言葉の意味を御祝辞下さったが、これが間もなく男子学生の知るところとなり、「知らんかい」などと揶揄する者がいた。芝蘭会のメンバーは毎日のように会っていた

ので、わざわざ日をきめて飲み食いする必要もなかったように思うし、そのうち芝蘭会そのものの存在も空気のように忘れられたようになったが、教官室の隣の女子学生室だけは、建物が消失する迄はその機能を果たしていたことと思う。

何しろ法律関係の講義に出る女子学生は二五〇名位の学生中私一人だったし、男子学生の殆どは高等学校単位にグループをつくっており、不幸にして私は知っている男子学生は一人もなかったので、全く孤立というか、生意気な言い方をすれば、身を引き締めていたので孤高を保っていたということになる。この状態は決して楽なものではなかった。第一講義のノートを借用する人は誰もいないので講義を休むことができなかった。講義について話をする相手がいないので、本を漁るしかなかった。従ってよく研究室そばの図書館へ行った。一年の秋だと思う。図書館を出たところで一枚の落葉を拾い、持合わせた本に挟んでおいたものが先年発見された。本は石田文二郎先生の「土地総有権史論」で、発見者は同級生の坂本吉勝氏である。今こそ同級生には御懇意にあづかっているが、学生時代には殆どの方と口もきいた事がなかったのである。五十年書棚にあった同書を坂本氏にお貸ししたのが機縁で、学生時代を思い出させる一葉の桜の枯葉と再会することができた。

私の入学の一年後、その又次と一名づつの女子学生が法律を勉強するために入学してこられたので、教授方にも学生達にも珍しさが薄れていったように感ずると共に、私の身構の姿勢も次第に柔らかくなったのではないかと思う。

毎日の必要に迫られての真面目な講義出席ではあったが、段々と理解力も育って、先生の講義に引込まれて行くようになった。先生方はいづれも新進気鋭の方ばかりだったから、さすが大学だと、それに身を置く自分に多少の誇りを持つようになって行った。私のとった単位はすべて法律関係のものだったが、法文学部だから他の分野の講義を聞くことができた。田中館先生のスライドを用いての植民地理学、帰英後桂冠詩人になられたホッジソン教授の英語による英文学は楽しい講義だった。中川先生の身分法学は明治民法を踏まえ乍らも大正デモクラシーの理念を投影させながら、家、法律上の男女の差別問題をそれとは気づかせないような名調子の講義だった。法律相談所での勉強経験は忘れ難い。七番丁にあった暗い老人ホームの一室から元鍛冶町の教会の明るい三階に移ったが、相談来所者に与えられる先生の御教示は名医の診断に似ていた。先生の講義を受けられたからこそ、戦後企業活動の自由・公正・消費者利益の確保につき強い関心をもち独占禁止法の理解もできたので、先生に対する学恩は忘れることができない。

私は米国の大学で犯罪にかかわる応用心理学を学びたいという希望が果たせなくて、東北大で法律を勉強することになったので、副手・助手として大学に残して頂いたのは刑法教室だった。公法関係の副手・助手が一つの大部屋で机をならべて勉強もしたし、運動もした。ある時教授方と副手・助手が野球をしたことがある。人数が不足して私も出された。女学生時代お転婆娘でインドア・ベースボールに夢中になっていたので大体のルールは知っていた。中川先生は私にこともあろうにセンターを守れと命じられた。誰かが一発放ったのを気がついてみたら球はミットに納まっていて一応の面目をほどこした。またバットを振ったら球は兎にかく飛びレフトに取られたのを記憶している。この時石田先生は袴を穿いておられ、バッターボックスから左右いづれの方向に走るのかわからず、見物人に騒がれてファーストに走り出し、アウトになって一同大喜びをした。然し先生はテニスがお上手でダブルスを組ませて頂いたことがあったが、私が失策をすると後ろから叱声が飛んだ。ある時斎藤秀夫さんが敵方の前衛で強いスマッシングをかけられ、私は呆然としていたら、同氏は「ノー・モンク」と叫ばれた。この声は不思議と今でも耳底に残っている。或時水上温泉へ先生方と副手・助手が一泊旅行をした。その夜の懇親会の席上で田岡良一先生が舞扇を持参されていて、たしか羽衣の舞をご披露下さり、私は先生の御趣味の広さに感にうたれた。当時お集まりになった先生、研究室の方々の中で既に鬼籍に入られている方が多い。謹んで御冥福を祈る。

（昭7年卒）

思い出すままに

元静岡大学学長　丸山　健

学生時代の筆者

入学は一九四二年の春、戦争も二年目を迎えて、何かしら気忙しい日々であった。それでも片平丁だけは、時局から取り残されたように昔日の面影を留めており、講義も学者らしい魅力に溢れ、学生も落ち着いて教室に出ていた。風薫る中庭の園遊会では、教授も学生も北から南の順つまり弘前から台北までの出身高校ごとにテーブルを囲み、心行くままにジョッキを満たして一時を謳歌したことであった。

下宿は正門からすぐの下り坂の所で、向いは少年感化院の塀であった。宿を出て更に下れば、清冽な流れの河畔に到る。仙台はよくハイデルベルヒに比擬されていたが、そこには、学問的に他の帝大を凌ぐべき抱負も秘められていたのであろうが、加えて当時は両市の人口も同じ程度であり、広瀬川の水量はネッカー川ほどではないにしても、対岸に城跡と青葉山を見晴かすあたりは、慥かに似通うところであった。師団を除いて他にめぼしいものもなく、戦前の杜の都は、正に Universitätsstadt であった。

河鹿の鳴く頃、肺浸潤の為に帰郷。あの年は高校の最初の卒業繰上で、秋に新学年が始まることになっていたから、それまでの数か月の休学である。ミッドウェー海戦の悲報に続いてガダルカナル島に米軍が上陸。冬の訪れとともにスターリングラードの攻防が伝えられ、最早、誰の目にも下り坂の戦局の中で年は明けた。やがてアッツ島玉砕、キスカ島撤退と追い詰められて、夏休みは出征する友人・知人の見送りや壮行会で明け暮れた。かなかな蝉の哭が一入身に泌む短い夏であった。仙台に帰ったら管制下で、夜の街は驚くほど暗かった。

九月二十二日夕刻、首相の放送で、文科系の大学・高校・専門学校の閉鎖決定を知った。学生は、遠からず墓参を兼ねて本籍地に帰り、徴兵検査を受けることになった。せめて別れの高校クラス会をやろうと、全国、と言っても法文系学部を有していた東京・京都・東北・九州の四大学から、かつての級友が上ノ山に相集い、深まり行く秋の一夜を飲み明かした。

好きな登山も二度とはできまいと、慌しさの中を月山に行った。夕陽に眩しく映える寒河江川、錦繍の間沢、末枯れた志津の宿の黒光りする柱、街道を便乗した旅芸人のトラックで女の子が林檎を分けて呉れたことなどが今だに懐しい。病気が全治した訳ではなく、肺患学生の療養所めいた長町の杜南寮で暮らしていたが、朝は早く起きて煙草を買う行列に加わり、講義の後は三越の地下にコーヒーを飲みに通う日課であった。十月末の検査も迫ったので、床屋で一握の髪を白紙に包んで貰い、刈り取られた稲穂がそのまま冷い雨にそぼ濡れているのを車窓から眺めて郷里に向かった。

検査場も雨だった。検査官に、志望兵科は海軍と申告。軍艦なら一蓮托生であろう。陸軍の一兵卒になって重い物を担がされ、挙句の果てに、散兵線で「戦友」の歌詞のようにぽつんと独りで死ぬのは、考えるだけでも遣切れなかった。海軍は視力の点で撥ねられ、第二志望の戦車隊と答えた。理由は、海軍の場合と同様である。どうせ生きて帰れるとは思ってもいなかった。

幾日もない学生生活と覚悟して、それでも矢張、仙台に帰った。講義の出席者は日を追って減少の一途を辿り、互いに明日のことも分からず、再開を約するときには「まだ仙台にいるようだったらね」と笑い合うのが習わしであった。三越のコーヒーも午前に限られた。別れの盃を交わす夜毎であったが、死との直面についても、再び学舎に帰る願に関しても、何故か触れなかった。今でも時に歌われる「ミス仙台」の番外に「清い夢見た白鳩の／翼破れて旅の空／思い出すのも涙がち／あの日があの日が懐しや」というのがあった。座興の作かもしれない。意地でも軍国的なのは歌わなかった。かくして友は去り、私もバッカスの助けを借りて、某日、黄昏の仙台を後にした。

十二月一日の朝、秋田の寒々と

した営門を潜った。十日に海軍に入団する友人が営門の前で待っていてくれ、黙って手を握り合った。兵隊に急き立てられて寸秒の惜別。コートの襟を起こして霙を受けていた彼の姿を、在り在りと思い浮かべることができる。あれきり、会うことはなかった。比類なき好漢は、実り多かるべき人生を無残に断ち切られて南溟に散った。

敗戦、さなきだに蓄積の少なかった法律学も外国語も綺麗に忘れて、一九四五年孟秋に復員。様変わりをした仙台駅に降り、焼野原と化した市街の彼方に、それだけは流石に美しい青葉山を眺めて、暫くは思いも定まらなかった。気を取り直して大学に行ってみたら、法文学部の木造校舎は跡形もなく、芝生は耕されていた。食糧も宿の手当てもなく、我物顔にジープで走り廻るアメリカ兵の奇声に限りない屈辱感を味わった。

日が経つにつれて学生も次第に集まり、焼け残っていた法文一・二・三番教室と工学部の教室で講義が再開された。学生服は滅多に見当たらず、殆どが国民服や軍服であった。偶に学帽の横に私の出身高校の徽章を着けた学生に出会い、懐かしさに引かれて話しかけてみたりもしたが、軍隊に行かなかったそれらの後輩とは妙に話もかみ合わず、徒らに、若い日の二年という年月の長さを痛感するのみであった。

卒業は翌年の秋。式の前夜は山形で酔い潰れ、叩き起こされて未明の仙山線に乗った。居眠りをして、同じようにうとうとしていた隣のお嬢さんと、派手に頭をぶっつけた。それが因で仙台に着いてからの方向も同じだったので、片平丁まで荷物を持ってあげた。大学に着くや、念の為に掲示板の卒業生名簿を確かめることにした。些か自信がなかった故である。お嬢さんもついて来た。そして「よろしゅうございましたわね」と微笑んで立ち去った。到底、まともに卒業できそうな学生とは映らなかったのであろう。

然し良くしたもので、大学では、私のような心細い卒業生の為に特設研究科を開いてくれることになった。お陰で、戦争できちんと勉強しなかった科目を中心に聴講することができた。而も既に卒業しているので、今更、在学生のように試験や単位を気にする必要もない。彼等を斜交に見やりつつ、悠々と受講した。

惟えば、決して自慢できるような学生生活ではなかった。それに戦争という異常な条件下でもあった。にも拘わらず、古き良き時代の先輩や物質的に足らざるはなき昨今の学生を、決して羨しいとは思わない。何と言われようと、私にとっては最高の大学であった。

若しも神が在して、再び青春を与え、此の世のどの大学にでも入れてやると言われたら、青春は唯一度の故にこそ素晴しいのだから、この方は散えて辞退するとしても、大学に関しては、何のためらいもなく東北大学を選ぶであろう。

（昭21年9月卒）

同窓の大先輩から多額のご寄付

―昭和十八年卒　飯塚

―毅氏より壱千万円のご寄付―

昨年六月の理事会の席上で、同窓会の決算を審議していたとき、そのあまりの貧弱な財政状況を見て、まことに情け無いものだとして出席された理事のお一人が多額の寄付の申し出をなされた。

その方は、昭和十八年卒の公認会計士・税理士でTKC全国会会長をしておられる飯塚毅先輩で、わざわざ同窓会の理事会にご出席され、その席上でこのご寄付の意思を表明されたものであった。

確かに同窓会の財政は、現状では年々先細りとなるような状況で、事務局としてまことに憂慮に堪えないところであった。

そのような窮状を見兼ねてのお申し出であったが、その金額が壱千万円という高額なものであったので、一同驚きもしたが大変有り難く、早速頂戴することとした。

七月二十一日に常任理事の阿部純二教授と事務局長の私がTKC全国会の事務局に飯塚会長をお訪ねして、受け入れの方法について打ち合わせをし、同窓会の口座に振込をして頂くこととなり、早くも同月二十八日に送金が実行され、同窓会の預金口座に入金となった。

飯塚先輩はこのご寄付について、使途に全く条件をつけず、同窓会で必要とする費用であればどのような使途でも、例えば日常の運営費の補充として消費しても良いと言われたが、私ども事務局としては勿体なくて漫然と一般経費に充当するなど、とても出来ない

気持ちでいる。しかし、お気持ちに沿うように、無駄を排し重要なところに効果的に使わせて頂きたいと考えている。

このご好意に対し、同年十月の同窓会総会で感謝状を贈呈することとし、ご披露のうえ、前記二名が使者として翌日ご自宅へお届けしたことを報告するとともに、先輩の母校同窓会へのご配慮に改めて感謝の意を表する次第です。

（事務局長・佐々木尚介記）

東北大学全学同窓会の再発足と

創立記念懇親パーティーについて

東海林　恒　英

明治四十年（一九〇七年）六月、東北大学創立以来、昭和六十二年で丁度八十周年を迎えることから、石田名香雄学長を中心に学内で検討されていた全学同窓会結成の論議が、各学部からの推薦委員により正式に始まったのは昨年一月のことであった。

この全学同窓会については、三十年前の昭和三十二年に本学創立五十周年を期して結成されたことがあったが、年月を経る間に全く有名無実化したという経緯をふまえ、東北大学全学同窓会再発足準備委員会の名称のもとに学長主宰で会が開かれたのであった。

以下全学同窓会再発足に当たって論議された主な点は次の通りである。

まず、この再発足が来るべき二十一世紀初頭に迎えることとなる、本学創立百周年記念の有意義な事業実施にむけての、助走開始の画期としての位置づけがなされた。

次に、各学部別同窓会の多様な実体と現状を尊重し、新しい全学同窓会はこれら各同窓会のゆるやかな連合体としての性格づけが基本とされた。そのため学制の変革による包摂校卒業生や、それらを含む同窓会へも広く門戸を開放することとしている。

事業については、とかく広げすぎることによりそれに拘束された先例にかんがみ、当面創立記念日に懇親会等を開催する程度とし、会報や名簿の発行は将来への検討課題とした。

また、新潟や北海道など各地の実情から、学部の垣根をとり払った全学同窓会の支部も、職域、地域にかかわりなく会員の希望で作ることが認められた。

この再発足に際して必要な経費については初年度に限り五十万円とし、構成員である各同窓会、附置研究所が均等割と学部卒業生の割合で分担することとなり、法学部同窓会の初年度負担は四万三千円となった。

創立八十周年の記念行事は、昭和六十二年六月二十日土曜日午後一時半からの記念講演会（主に学内）と同日午後四時半から仙台ホテルで開催の全学同窓会懇親パーティーが中心となり、この前後に展示された片平丁の記念資料室の特別展がこれに彩りを添えた。

懇親パーティーは在仙の同窓生を中心に五百人を越す盛況で、全学同窓会長（石田学長）の挨拶に始まり、東北大学創設と年を同じくする加藤陸奥雄前学長の乾杯の音頭で盛り上がりを見せた。更に現役の東北大男性合唱団による懐かしい寮歌や応援歌に加え応援団諸君の出演など、折からの雨天も忘れる盛会であった。

昭和六十三年の創立記念行事は、節目の年と異なり小規模で実施することとし、去る六月十八日青葉山の工学部を会場に講演と懇親会が開催された。講師は本法学部同窓会の会員である明間輝行東北電力社長で東北の発展とエネルギーの変遷について将来への示唆に富んだ講演であった。その後約百五十人の参加による懇親パーティーが、雷雨の後の緑に輝く青葉山を見はるかす青葉記念会館ホールで開催され和やかな雰囲気のうちに創立八十一周年の記念行事が終了した。

なお、懇親パーティーには、法学部同窓の伊藤宗一郎科学技術庁長官が出席され、挨拶があったことを申し添えて全学同窓会の再発足に関する報告をしめくくる次第である。

（昭33年卒・宮城支部事務局長）

会報原稿募集

いつでも募集しています。各卒業年次の幹事の方は、同期会の様子などについて原稿をお寄せ下さい。八〇〇字程度で、写真を添えてあればなお結構です。卒業周年記念の全国大会などに際しては是非お願いしたいと存じます。直接事務局へお送り下さい。

同窓会総会報告

佐々木　尚　介

昭和六十二年度の同窓会総会は十月二十九日午後六時からホテルリッチ仙台蔵王西の間に於いて開催された。

宮城支部事務局長東海林恒英氏の司会で始まり、同窓会長・関口栄一法学部長のご挨拶では、飯塚毅氏からの多額のご寄付についてご披露があり、さらに母校の現状について、良い学生を育てて送り出すことに重点を置いていること、半期制のカリキュラム編成について、他学部の科目の自由聴講制について、法学部の新しいスタッフについてなどのお話しがあり、続いて、宮城支部長・津軽芳三郎宮城県副知事から地方の時代となって地元の東北大学が脚光を浴びていることなどのご祝辞があり、議事に入った。

昭和六十一年度同窓会の決算の承認と、若干の会務報告がなされ、引き続き飯塚毅氏からのご寄付についての経過報告の後、氏に対する感謝状の披露が満場の拍手のうちになされ議事を終了した。

続いて佐藤唯人氏の司会で懇親会となり、大先輩の真子伝次氏の熱声溢れるご挨拶による乾杯に続き、来賓の恩師から高柳真三先生、外尾健一先生、廣中俊雄先生の順でスピーチがあり、先生方の近況や法学部についての思い出などユーモアたっぷりのお話しは、参加者一同在学中の講義を思い出して懐かしくも嬉しい一時であった。懇談のうちに時を忘れ再会を約しお開きとなった。

（昭32卒・事務局長）

支部だより

東京支部会

小　幡　常　夫

六十二年度は当支部会にとって、言わば記念す可き年だった。先に本部に於いて全学同窓会再建問題が石田学長より提案されていたことは、前年度当支部会総会での関口学部長のご挨拶の中にあったと前号で報告して置いたのであるが、六月仙台に於いて正式に発会のセレモニーが行われ、十学部の同窓会が参加して盛り上がったと報告があった。この席で、東京方面でも是非支部を結成して欲しいと、学長から医学部東京支部代表に強く要請され、神津氏より当支部会への話し掛けがあり、先づ法経理工医の五学部の代表者の会合が持たれたのが七月だったと思う。

思うに各学部同窓会の内幕は誠に多種多様、組織もある・なしの違い、人数も運営方針にも大きな隔りがあり、関東地区全員を掌握して組織を恒常的に維持することは不可能と判断した。然し切角の本部の要請に答えるには、一種のサミット方式で結集して見ては如何と提案し、各学部代表も同意されて事務的に作業を開始した。先づ組織は関東支部として規約化するが、解釈・運営はゆるやかに且つ弾力的にすることとし、顧問に黒川学士院々長、茅元東大総長、松前東海大総長を推載し、支部長に安西東京ガス会長をお願いする。事務局は当所法学部代表を長とする各学部代表世話人の代表幹事制とすることで一応枠組が出来た。

十一月十二日、ニューオータニの設立総会には予定を上廻って二百三十四名が出席、小幡議長の議事運行で無事全議案が承認され、安西新会長挨拶、黒川顧問挨拶、石田学長の感謝の祝辞、又国会中を駆付けられた伊藤科学技術庁長官の挨拶の後立食パーティに入り、加藤登紀子さんの友情出演に湧き、寮歌合唱の番外アトラクションも加わり成功裡に会を閉じたのである。当議決に基づいて会長・顧問の推薦により石原日産自動車会長が副支部長に決まり承諾されたことを追記して置く。

さて東京支部会の総会は、十二月三日の新橋第一ホテルで開催され、百二十名出席のもとに賑々しく楽しい一夜であった。石田副会長が転居先の九州から出席され、勲一等叙勲のお祝いを受けられた後、その経過に就いてご挨拶され、又第一回卒業の小橋先輩も久し振りに顔を見せられ、お元気な声で乾杯の音頭をとって頂くことが出来た。

この度は特に全学同窓会のため尽力された神津医学部代表幹事をお招きして祝辞と共に経過報告をお願いし、二十七年間全国寮歌祭を主催して来られたあの美声で熱弁が展開されたが、内容は先に要約した通り。当支部会の大黒柱である杉副会長が病に倒れられお見えになれなかったのが残念だった。例年通り安西会長からは特別の会費ご寄附の外、美人バンケットの接待サービス、仙台からの本部幹

部ご慰労の二次会招待等、大変なお気遣いを頂いたことを心から感謝申し上げてこの稿を終わります。

（昭14年卒　東京支部事務局長）

青森支部

小野隆平

当支部の総会は十月二十四日、青森市八甲荘において会員三十五名出席のもとに開催された。今回は久し振りに本部より樋口陽一東京大学教授兼東北大学講師を招聘したので大いに盛り上がりを見せた。

支部長の竹中修一代議士は、時あたかも後継総裁選びの関係で出席が危ぶまれたが、タイミングよく出席できた。

当支部は昭和三十六年に設立されたが、故中川善之助先生、高柳真三先生などのご来臨を仰いだこともあった。昭和三十年代から一時会員数が伸び悩んだこともあったが、四十年代からは順調に増加して、県内各分野で活躍している。

（昭32年卒）

新潟支部

小島康裕

昭和五十九年（一九八四）に再建された、法学部同窓会の新潟支部は、この七月九日の総会で第五回を迎え、目下順調に運営されていると報告したいところである。ところが、支部を再建し、事務局も定めたすぐ翌年から、全学同窓会という重責を法学部が背負いこまざるを得なくなって、依然として苦しい支部運営を強いられている。このようなことになったのはそれなりの理由がある。東北大学の同窓会で、本部組織がかなりしっかりしているのは、工学部の青葉工業会と医学部の艮陵会で、旧法文系では法学部だけである。従ってその他の学部では支部組織を作り難い状況にある。そして既存の支部組織はいずれも弱体である。しかし、法文系学部はもともと同じ釜の飯を食った仲だという意識が年配の同窓には強い。理科系の同窓にも、たまには東北大学の名において一堂に会したいという気持ちがある。それならいっそ、全学同窓会という形で、新潟在住の全学部の同窓が気兼ねなく参加できる組織をつくろうというわけで、学部同窓会は毎年開催するが、全学同窓会が開かれる年度は、そこに相乗ができることにして、法学部同窓会支部事務局が全学の事務も引受けることになった。

しかしこのように組織は、言うまでもなく、構成員の強い帰属意識がなければ成り立たない。全学というような緩い連合体となると、帰属意識にはあまり期待ができず、その結果はたちまち法学部支部の財政に深刻な影響を及ぼした。

財政面からみると、大変暗い話になるのであるが、専門外の貴重な知識が同窓会という機会を通じて得られるという無形の利益を享受できるのは、総合大学の同窓ならではのことである。昨年は全学第二回同窓会の年度（法学部としては第四回）にあたっていたので、「脳死と臓器移植」について講演を佐武明氏（昭和三十年医学部卒・現新潟大学脳研究所教授）にお願いし、重要な現代の問題を会員が勉強をする機会とした。同窓会というのはたんなる懐古趣味ではなく、会員の自己啓発の場であるということの理解が深まれば、全学同窓会も成功するものと思われる。

今年度は、法学部同窓会の年度であったが、上述の考えを踏まえて、法文系の卒業生に呼び掛けたところ、経済学部六名、文学部一名の参加があった。

ところが、法学部の同窓の参加は、二十八名で、これまでの最低であった。この低調さの主なる原因は、次のようなことであろう。

一　本年度は、名誉教授を招いて講演をしていただくなどの、イベントを行わなかった（これまで、第一回は、名誉教授高柳眞三先生、第三回は、名誉教授世良晃志郎先生を招いており、またその際には本部より学部長および同窓の現職教授も同行されている。全学に相乗をした第二回は、石田名香雄学長を招いている）。

二　転勤族の住所の掌握が不十分であった。

三　若い会員が多くなり、理事会

の意識とのずれが顕在化した。

四　その他。

此度の第五回総会では、このような反省を踏まえて、理事の若返り、若手を中心とする運営委員会の創設などが検討課題とされた。また、懇親会の持ち方については法文規模のものとする方が地方の実情に合うというコンセンサスもできた。新津義雄理事長（支部長）は、この七月より本職の石油製品販売業の株式会社丸新の社長および同グループの代表のほかに、新潟テレビ放送網（NTT・日本テレビ・読売新聞系）の社長を兼任することになったので、マスコミ的感覚を同窓会運営にも応用しようと張り切っている。

同窓会支部の報告としてはいささか堅苦しくなったが、支部は支部なりに悩みがあるということで、御了解をいただきたい。なお、転勤で新潟に着任されたときは、かならず事務局（〇二五―二二九―一三三一　株式会社丸新総務部・事務局担当総務部次長、今井守）に御一報賜りたい。

支部同窓会は毎年、原則として七月に開催しますから、通知を差し上げます。

（昭34年卒・新潟支部事務局長）

岩手支部

菅原　和弘

去る六月二十五日（土）夕刻より、昭和六十三年度同窓会岩手支部通常総会が、ホテルリッチ盛岡で開催されました。

当日の午後は雨模様となりましたが、会員百余名の日頃の精進の甲斐あってか、開会前にはすっかり上がり、第一回生（大十五年）の高橋徳一郎先輩を筆頭に三十六名の参会を得ることができました。

岩手支部は、毎年欠かさず総会を開催してきておりますが、こうした諸先輩の運営努力のおかげをもって、今年で支部規約制定十周年を迎えることとなり、今総会はその記念総会となりました。

総会は、関文香支部長（昭八年）の挨拶のあと、仙台からおいでいただいた小山貞夫教授から、同窓会本部の動向、最近の卒業生の就職状況、法学部のカリキュラムの改編等興味深いお話を種々お伺いし、十周年にふさわしい有意義な集いとなりました。

続いて議事に入り、昨年度決算の承認と役員改選を行い、関支部長と渡辺武副支部長（昭十三年）を満場の拍手で再選、幹事四名と書記五名が指名されました。

総会終了後は懇親会を催し、渡辺副会長の音頭による乾杯で幕を開け、コンパニオンも交えて一年ぶりの再会に話しの花を咲かせましたが、恒例の自己紹介では、演説風のものあり、小咄風のものあり、宣伝風のものありと様々で、絶妙の野次も飛び出すなど、相変わらずの盛会ぶりでした。

散会後も、連れ立って二次会に出掛けた者が多く、中には三次会に及んで午前様となったグループもあったとか。筆者もその一員でありました。

（昭54年卒・岩手支部書記）

福島支部

佐藤　宗光

当支部は、昭和六十二年十月現在会員数一五六名を数え、昭和四十二年六月の支部発足（当時会員数六十四名）以来毎年増加してきております。会員諸氏は、県内の政界、財界、官界ならびに法曹界各分野の中心となってご活躍されているところです。

これらの方々より、毎年一回は一堂に会して懇談する機会が是非欲しいとの強い要望があり、昭和六十年度からは総会を毎年開催いたしております。

とりわけ昨年十一月福島市内の杉妻会館で開催されました第八回総会には、これまで最高の四十九名の会員が出席されました。同窓会本部からは阿部純二教授（刑法）の御出席をいただき、法学部の近況等についてのお話を伺いました。懇親会は、終始和やかな雰囲気の中で歓談が続き、盛会のうちに散会致しました。

なお、毎年総会開催に当たり、新しい支部会員名簿を作成し、全会員に配付いたしております。

これからの支部の事業については、総会開催のほか、記念講演会

の開催など、その内容を一層充実させるよう検討しているところです。

今後とも、本部のご援助、ご協力をいただき、支部発展のため努力をいたす所存ですので、皆様方のご支援、ご協力をお願いいたします。（昭26年卒・福島支部長）

職場だより

栃木県庁
とちぎ新時代

清水　明

栃木県庁に在職する東北大学卒業生で組織する「青葉会」会員は本年四月で一四五名、内法学部出身は五二名を数える。昭和三十年代にわずか十数名の仲間で始めたこの会が、歳月を経てこれほどの大世帯となるとは往時には予想だにできなかった嬉しい誤算でもある。現在法出身者のみによる定例的会合はなく、年一回開催される「青葉会」が全学的な交歓の場となっており、毎年五～十名の新会員を迎えるのが恒例となっている。その内法出身は三～五名、頼もしい後輩の姿を見ることができる。

さて、卒業年次順に近況を紹介してみよう。統計課長榊原正光（昭29）、地方労働委員会事務局長福田恒夫（昭31）、食品工業指導所長補佐小池次男（昭35）、南那須土地改良事務所長補佐野口要（昭40）、人事委員会事務局任用課長伊藤征史（昭41）、経営指導課副主幹根岸昭（昭45院）といったところが、いわば「青葉会」創生の頃のメンバーである。これに続くのは三十歳代の中堅どころ、地方課振興情報課長田村澄夫（昭48）、住宅課住宅管理課長小林道夫、人事課給与課長三浦義和、交通対策課交通体系係長藤田忠正、都市計画課開発指導係長野口明（いずれも昭49）、人事課人事係長我妻貞夫（昭50）の気鋭の面々。

ここに紹介した卒業年次からもお判りいただけるように「青葉会」一四五名の約八割りは二十、三十歳代の職員で占められており、今後の活躍が大いに期待されるところである。

次に既に県庁を離れた方の紹介をしてみると、前人事委員会事務局長村島英夫氏（昭29）は「青葉会」の会長として同窓生の信望も厚く、会の発展に貢献されたが、この春からは栃木県経営者協会参与としてご活躍中である。前商工労働部長大氣弘久氏（昭31）は、本年四月矢板市長に就任された。前市長の突然の辞任に伴う急な選挙戦に部長の職を辞し臨まれただけに、私たちも胸中穏やかならざるものがあったが、その卓越した行政手腕は矢板市民の大きな期待を受けとめるに十分なものであると確信している。さらに、梁瀬進氏（昭49）は、弁護士として県議会議員としてご活躍中である。他に弁護士としては石坂次男（昭38）、白井裕巳（昭50）の両氏が県職員のOBである。

さて最後に、各界各方面でご活躍中の皆様に栃木県のPRをひとつ。遷都論やらリゾートやらかまびすしい昨今、今ひとつイメージのピンとこない栃木県ではありますが、水も土地も交通も人材も、秘めた潜在力には自信があります。どうかこれからの栃木県に期待してください。

（昭33年卒・林務観光部次長）

青葉会近況報告
第一勧業銀行

笹子善平

第一勧銀の東北大学法学部出身者は、現在八十名を超える大世帯となっている。特に近年の金融自由化国際化の中で、採用者が増加しており、毎年四～五名の新人を迎え入れている。

同窓会活動は、法学部だけのものはなく、経済学部とも合同で、『青葉会』の名称で、若手を中心に年一会程度の懇親会を開く程度である。

とは言うものの、銀行の様な仕事上の判断に、経験が物を言う場では、利害関係のない先輩の直言・アドバイスは有難く、入行間もない若手にとっては、得難い情報交換の場となっている。又、先輩も利害関係を超越した大人が多く毎年盛況である。

会員の近況紹介をさせていただくと、紙面の関係もあり一部の方々にとどまるが、先ず前会長で現相談役である藤本鐵雄氏（昭19）、合併総仕上げの時機を持前のねばりと実力で乗り切られた。本店では、副頭取の高橋浩二氏（昭28）、各支店長に稲荷町に岡田揮久氏（昭35）、静岡に大高貞彦氏（昭37）、駒沢に小林幸司氏（昭38）、行徳に高橋純一氏（昭40）、小金井に宅重英彦氏（昭41）、金沢に菅原敏行氏（昭43）、そして当行最若手の支店長として、米国アトランタに鈴木正晃氏（昭46）らが

活躍している。又、昭和40年以前の卒業者は、銀行の関係会社等へ出向しているものが多く、第一勧信に遠藤智也氏（昭33）、渡辺寿男氏（昭40）、東京リースに石崎富士臣氏（昭34）、エースビジネスに小島徹也氏（昭36）、第一勧銀経営センターに藤野保昭氏（昭37）、ユニオンクレジットに今野文康氏（昭38）など、同窓の輪は、社外へも広がっている。

（昭55年卒・資金部）

同期会だより

萌木会三〇周年記念全国大会の記

本多義昭

昭和二八年入学・昭和三二年卒業同期（萌木会）の三〇周年記念全国大会が昨年八月二二日、松島湾の静かなかき筏を見下ろす景勝の地「ホテル一の坊」において盛大に開催された。

在仙幹事を始め関係者の周到な諸準備が奏効して、同期の三人娘を含め前回を上回る六五名の出席をえた。

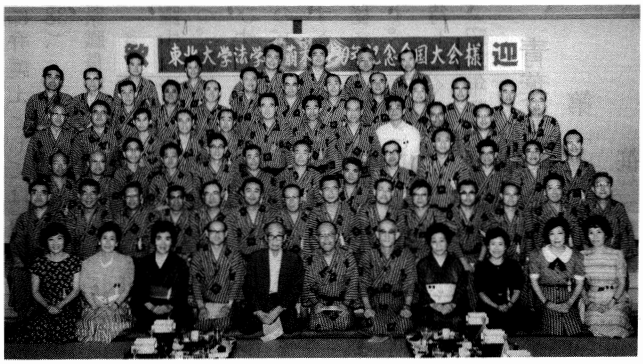
さらに、恩師（高柳、世良、広中、加藤の諸先生）、同期生夫人（樋口陽一君、佐藤正之君両夫人）ならびに特別参加のお二人の女性を加えて総勢七三名と過去最高の賑々しさとなった。

佐々木尚介君の司会により、在仙（田沼四郎君）在京（佐藤正之君）幹事代表の挨拶、高柳先生の乾杯の音頭で会は始まった。飲む程に酔う程に、タイムトンネルを抜けると三〇年の歳月も一挙に短縮され学生時代の気分に戻っていくから不思議である。外貌の変化には大分個人差があるものの、殆どの人は未だ社会の第一線で中堅として活躍しているためか、五十路を越したとは思われない程の若々しさが漂う。

とは言うものの、話題も学生時代の思い出から、自分の健康、子供の結婚、再就職等々やはり年齢を感じさせるものにわたり、時間のたつのを忘れて飲み且つ語り合った。

宴会には、三〇年前の卒業式直後ブラザー軒で開催された謝恩会で「さんさ時雨」を踊ってくれた往時のきれいどころが顔を見せ、これまでになく華やいだ雰囲気となった。

もちろん心得のある有志の唄と手拍子に合わせて三〇年前が再現されたが、その折りの木村亀二先生のいきな計らいが今更ながらしのばれる一刻であった。



会は一次会で終わるはずもなく、予定どおり二つの幹事室に適宜なだれこみ、騒然たる二次会となった。どんな酒を飲み、どんな話しをしたか、詳細は全然覚えていないと後日述懐した人もいた程で、大変楽しかった反面、やはり歳は争えないと少々寂しい思いも実感させられた。

共に学び共に遊んだ学生時代は年々遠くなっていくが、だからこそ共通の出発点としての青春の思い出は輝きを増すのではなかろうか。翌朝は五年後の再会を期して流れ解散となったが、一部有志は東海林館長の案内で、仙台市博物館を見学した。

なお、今回の三〇年記念大会の思い出として、懐かしい秋保電鉄の写真をかたどったテレホンカードが作成・頒布され好評裡に売りつくされた。

最後に、近年物故された故五十嵐幸雅君のご冥福を心からお祈りし大会の報告といたします。

（昭32年卒）

事務局よりお願い

(1)会費の納入案内が届くと、すでに送金している筈とか、終身会費をすでに送金した筈という異議がたまになされることがあります。多数の事務を処理するなかで、誤りは絶無ではないので、大変恐縮していますが、なかには東京支部への会費送金と本部への会費送金を混同しておられる方もたまにあるようです。本部と各地の支部は全く別会計となっていますので、どうかお間違いの無いようにお願い致します。

(2)お知り合いの方で名簿上住所不明となっている方の消息をご存じの方は是非事務局までお知らせ下さるようお願い致します。